

# 対照中間言語分析

ーコーパスに基づくCIAとSLA研究の比較からー

西南学院大学

杉山香織、小澤南海、山口奈美

# 本発表の構成

## 1. 対照中間言語分析 杉山

Granger, S. (2015) Contrastive interlanguage analysis: a reappraisal. *International Journal of Learner Corpus Research* 1:1. pp.7-24.

## 2. SLAにおける中間言語分析 小澤 山口

Benazzo, S., & Andorno, C. (2016) Is it really easier to acquire a closely-related. *Tense-Aspect-Modality in a Second Language Contemporary perspectives*. pp.105-143.

Ringbom, H., & Jarvis, S. (2009) The importance of cross-linguistic similarity in foreign language learning. *The handbook of language teaching*. pp.106-118.

Odlin, T. (2003). Cross - linguistic influence. *The handbook of second language acquisition*. pp. 436-486.

Rivers, W. P., & GOLONKA, E. (2009). 15 Third Language Acquisition Theory and Practice. *The handbook of language teaching*. pp. 250-266.

## 3. コーパス言語学における中間言語分析 杉山

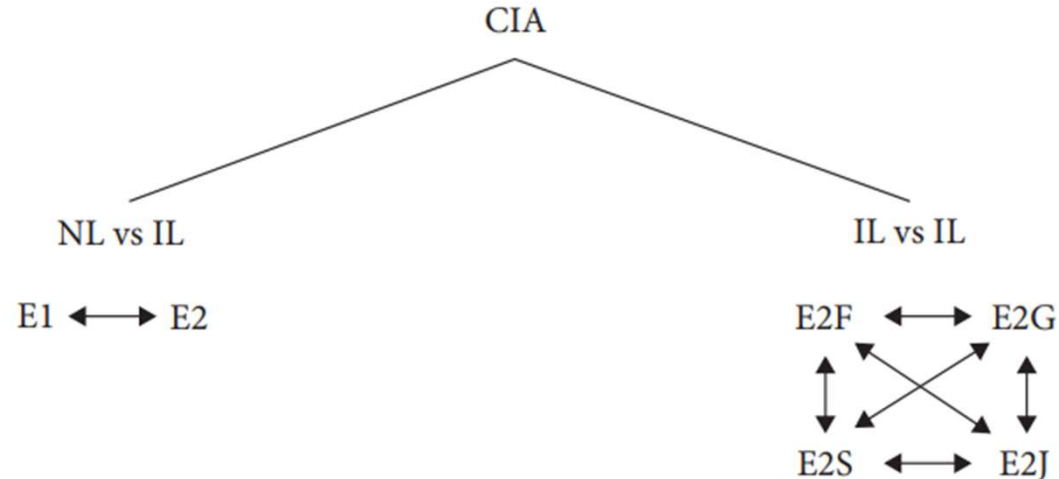
Granger, S. (2015) Contrastive interlanguage analysis: a reappraisal. *International Journal of Learner Corpus Research* 1:1. pp.7-24.

# 対照中間言語分析とは

- Contrastive Interlanguage Analysis (CIA:対照中間言語分析 )  
⇒ Sylvianne Granger (1996)
- 学習者コーパスの分野で広く使われるようになった用語  
⇒ 1980年代から

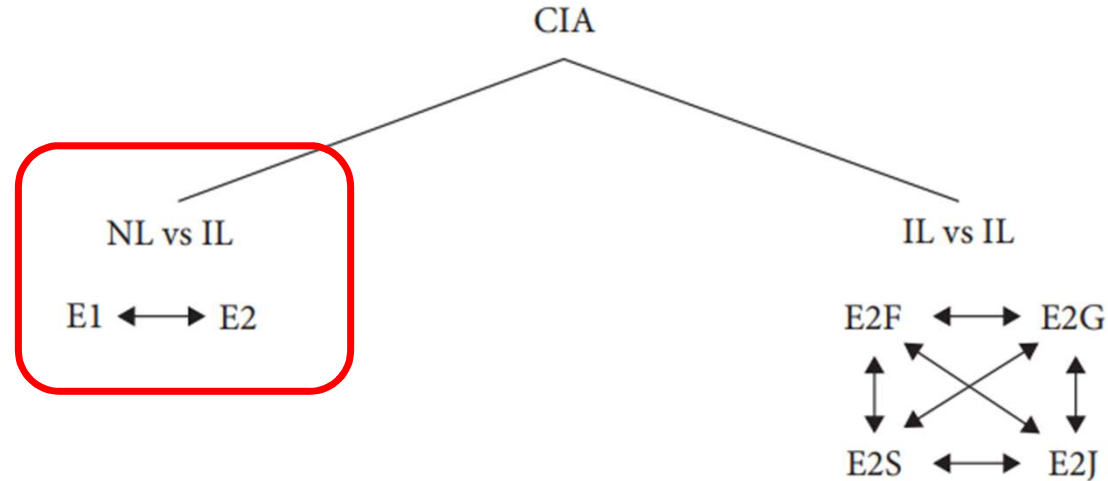
# 対照中間言語分析とは

- コーパスに基づく対照中間言語分析アプローチの方法  
⇒ 2つ以上の対象を並べ、類似点／相違点を特定する  
NL(母語話者言語)とIL(中間言語)の産出データ



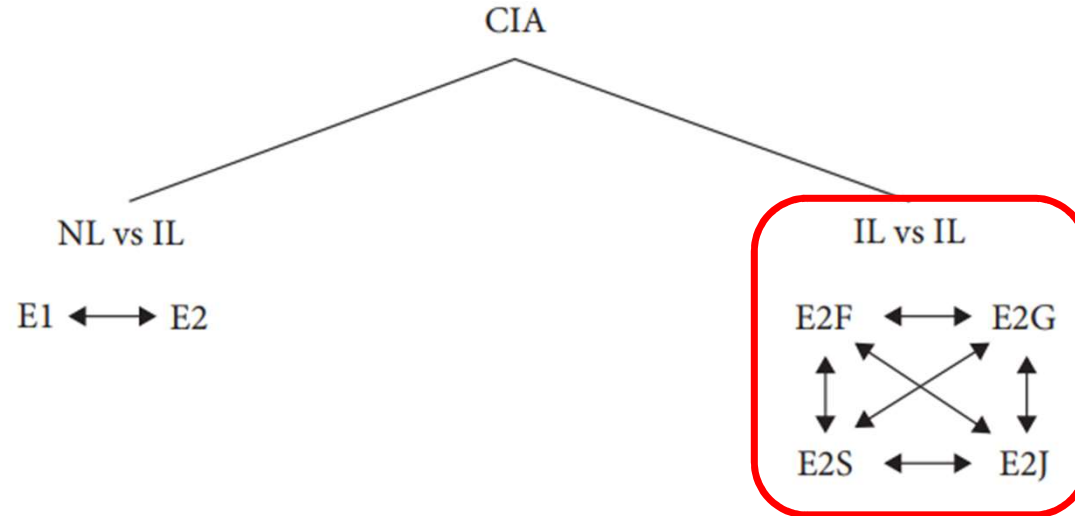
# 対照中間言語分析とは

- 過剰／過少使用、エラー



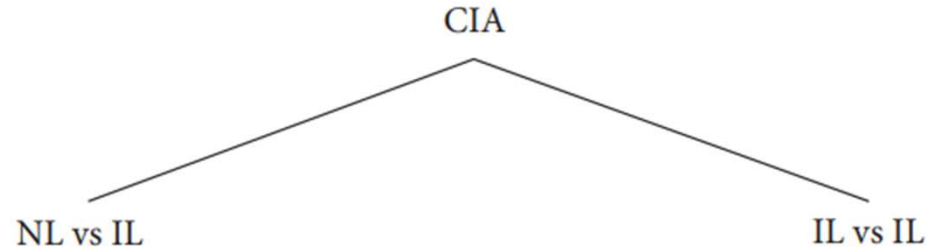
# 対照中間言語分析とは

- 母語の違いによる比較 ⇒ 転移についてより経験的な調査
- SLA ⇔ FLA
- タスク効果
- レベルの差



# 対照中間言語分析とは

- コーパスに基づく対照中間言語分析アプローチの方法  
⇒ 2つ以上の対象を並べ、類似点／相違点を特定する  
NL(母語話者言語)とIL(中間言語)の産出データ



SLA研究において、中間言語はどのように分析されてきた(いる)のだろうか？

# SLAにおける中間言語分析

- ・ 類似性
- ・ 転移



# SLAにおける中間言語分析

- ・ 類似性
- ・ 転移

# 類似性とは何か

- 実際の類似点 (Actual similarities)
- 仮定上の類似点 (Assumed similarities)

# 類似性とは何か

- 実際の類似点 (Actual similarities)  
: 言語学的に分析可能
- 仮定上の類似点 (Assumed similarities)  
: 言語学的に分析不可

# 類似性とは何か

- ・ 実際の類似点 (Actual similarities)  
：言語学的に分析可能
- ・ 仮定上の類似点 (Assumed similarities)  
：言語学的に分析不可

# 類似性とは何か

- 実際の類似点 (Actual similarities)  
: 言語学的に分析可能
- 仮定上の類似点 (Assumed similarities)  
: 言語学的に分析不可

# 類似性とは何か

- 実際の類似点 (Actual similarities)  
: 言語学的に分析可能
- 仮定上の類似点 (Assumed similarities)  
: 言語学的に分析不可

# 類似性とは何か

## <通言語的類似関係の種類>

- 類似関係 (Similarity relation)
- 対照関係 (Contrast relation)
- ゼロ関係 (Zero relation)

# 類似性とは何か

## <通言語的類似関係の種類>

- 類似関係 (Similarity relation)
- 対照関係 (Contrast relation)
- ゼロ関係 (Zero relation)



# 類似性とは何か

## <通言語的類似関係の種類>

- 類似関係 (Similarity relation)
- 対照関係 (Contrast relation)
- ゼロ関係 (Zero relation)

# 類似性とは何か

## <通言語的類似関係の種類>

- 類似関係 (Similarity relation)
- 対照関係 (Contrast relation)
- ゼロ関係 (Zero relation)

# 通言語的な類似性とSLA研究

学習者は、目標言語（TL）と、  
すでに持っている言語知識とを結びつけようとする。

# 通言語的な類似性とSLA研究

学習者は、目標言語（TL）と、  
すでに持っている言語知識とを結びつけようとする。

学習者にとって効果的：

類似点 > 相違点

# 通言語的な類似性とSLA研究

学習者は、目標言語（TL）と、  
すでに持っている言語知識とを結びつけようとする。

学習者にとって効果的：

類似点  $>$  相違点

SLA研究の傾向：

類似点  $<$  相違点

# SLA研究における中間言語分析例

Benazzo & Andorno(2017)より

## <目的>

フランス語中上級学習者（イタリア語母語話者とドイツ語母語話者）を対象に、ストーリーリテリングタスクを行い、反復および継続マーカーに焦点を当てて、習得過程において第一言語が果たす役割の可能性を考察すること

# SLA研究における中間言語分析例

Benazzo & Andorno(2017)より

## <目的>

フランス語中上級学習者（イタリア語母語話者とドイツ語母語話者）を対象に、ストーリーリテリングタスクを行い、反復および継続マーカに焦点を当てて、習得過程において第一言語が果たす役割の可能性を考察すること

# SLA研究における中間言語分析例

	イタリア語	フランス語	ドイツ語
反復	ancora, di nuovo / nuovamente, un'altra volta	encore, à / de nouveau, une nouvelle fois	nochmal(s) erneut, wieder
	ri-V	re-V	-
継続	ancora	encore, toujours	(immer) noch
	continuare a + V (inf)	continuer à / de + V (inf)	weiter-V



# SLA研究における中間言語分析例

	イタリア語	フランス語	ドイツ語
反復	ancora, di nuovo / nuovamente, un'altra volta	encore, à / de nouveau, une nouvelle fois	nochmal(s) erneut, wieder
	ri-V	re-V	-
継続	ancora	encore, toujours	(immer) noch
	continuare a + V (inf)	continuer à / de + V (inf)	weiter-V

語彙的  
マーカー

形態統語的  
マーカー

# SLA研究における中間言語分析例

## <RQ>

(1) 反復および連続性の表現のための時間的マーカ―は、中級および上級フランス語学習者において、どのように習得されるのか。

# SLA研究における中間言語分析例

## <RQ>

- (1) 反復および連続性の表現のための時間的マーカ―は、中級および上級フランス語学習者において、どのように習得されるのか。
- (2) フランス語と典型的に近い言語であるイタリア語を母語とするフランス語学習者は、TLから第一言語がより遠い学習者と比較して、第一言語の構造に頼る傾向が強いのか。習熟度はどのように影響しているのか。

# SLA研究における中間言語分析例

<データ>

ストーリーリテリングタスクのデータ

# SLA研究における中間言語分析例

## <データ>

ストーリーリテリングタスクのデータ

## <対象者>

- フランス語、イタリア語、ドイツ語ネイティブ（各20人）
- 中級・上級レベルのイタリア語を母語とするフランス語学習者（各15人）
- 中級・上級レベルのドイツ語を母語とするフランス語学習者（各15人）

# SLA研究における中間言語分析例

## <結果>

(1) 反復および連続性の表現のための時間的マーカは、中級および上級フランス語学習者において、どのように習得されるのか。

# SLA研究における中間言語分析例

## <結果>

(1) 反復および連続性の表現のための時間的マーカ―は、中級および上級フランス語学習者において、どのように習得されるのか。

語彙的マーカ― > 形態統語的マーカ―

# SLA研究における中間言語分析例

## <結果>

(2) フランス語と類型的に近い言語であるイタリア語を母語とするフランス語学習者は、TLから第一言語がより遠い学習者と比較して、第一言語の構造に頼る傾向が強いのか。習熟度はどのように影響しているのか。



# SLA研究における中間言語分析例

## <結果>

(2) フランス語と類型的に近い言語であるイタリア語を母語とするフランス語学習者は、TLから第一言語がより遠い学習者と比較して、第一言語の構造に頼る傾向が強いのか。習熟度はどのように影響しているのか。

中級レベル：形態統語マーカ―は使用されない

# SLA研究における中間言語分析例

## <結果>

(2) フランス語と類型的に近い言語であるイタリア語を母語とするフランス語学習者は、TLから第一言語がより遠い学習者と比較して、第一言語の構造に頼る傾向が強いのか。習熟度はどのように影響しているのか。

中級レベル：形態統語マーカ―は使用されない

上級レベル：言語間の近接性の悪影響あり

# 類似性に関連した教育への示唆

## <教師側>

- 

## <学習者側>

- 
- 
-

# 類似性に関連した教育への示唆

## <教師側>

- 第一言語と第二言語の関係

## <学習者側>

- 
- 
-

# 類似性に関連した教育への示唆

## <教師側>

- ・ 第一言語と第二言語の関係

## <学習者側>

- ・ 受容と産出の違い
- ・ 言語の習熟度の違い
- ・ 学習者の性格

# SLAにおける中間言語分析

- ・ 類似性
- ・ 転移

# Cross-linguistic Influence(言語間の影響)

- 長い間研究者たちの注目をひいている概念
- 多くの研究、様々な見解
- この現象を包括的に説明できる学説はまだ存在しない
- CLIの理解の難しさ

# 転移とは

- Transfer:

TLと、習得された（あるいはその途上にある）言語間の  
類似性と相違点から引き起こされる影響 (Odlin 1989)

- TLからのインプットと、人間言語の普遍的特性、それらと交わった振る舞いをカバーする語 (Selinker 1992)
- 全ての言語サブシステムで働く (Odlin 2003)



# Cross-linguistic Influenceを表す単語

language transfer, linguistic interference, the role of the mother tongue, native language influence, and language mixing.....

広く使用されているのは

- Transfer(転移)
- Cross-linguistic interference (言語間の影響)

# Cross-linguistic Influenceを表す単語

- Transfer
- Cross-linguistic Influence

# Cross-linguistic Influenceを表す単語

- Transfer



- Cross-linguistic Influence

# Cross-linguistic Influenceを表す単語

- Transfer



- Cross-linguistic Influence



- Interference ?

- *Languages in Contact* (Weinreich 1953)では同義的に用いられている

# Cross-linguistic Influenceを表す単語

- Transfer

- Cross-lingui

- Interference ?

- *Languages in Contact* (Weinreich 1953)では同義的に用いられている

## Transfer

- Positive transfer (正の転移)

: 言語間の類似性から生じているであろう言語の習得を容易にする影響 (Odlin 2003)

- Negative transfer (負の転移)

: 第一言語を基礎とした項目や構造の不適切な使用を導く新しい単語や構造の適切な使用を妨げたり抑制したりする (Ringbom & Jarvis 2009)

# Cross-linguistic Influenceを表す単語

- Transfer



- Cross-linguistic Influence



- Interference ?

- *Languages in Contact* (Weinreich 1953)では同義的に用いられている

# 転移は何に影響されて起きるのか

- L3習得において転移を引き起こす源は...
  - L1 (Ringbom 2001)
  - L2あるいはその他の母語でない言語  
(De Angelis & Selinker 2001, Hammarberg 2001, Sikkogukira 1993, Leung 1998)

# 転移は何に影響されて起きるのか

- 類型学的距離

- 転移において重要な役割を果たす

(Cenoz 2001, Fouser 1995, Kellerman 1983, Singleton 1987)



# 転移の研究例 1

- Cenoz 2001

スペイン語・バスク語のバイリンガルの英語習得を研究

バスク語

スペイン語

英語

# 転移の研究例 1

- Cenoz 2001

スペイン語・バスク語のバイリンガルの英語習得を研究

バスク語-----スペイン語-----英語

# 転移の研究例 1

- Cenoz 2001

スペイン語・バスク語のバイリンガルの英語習得を研究

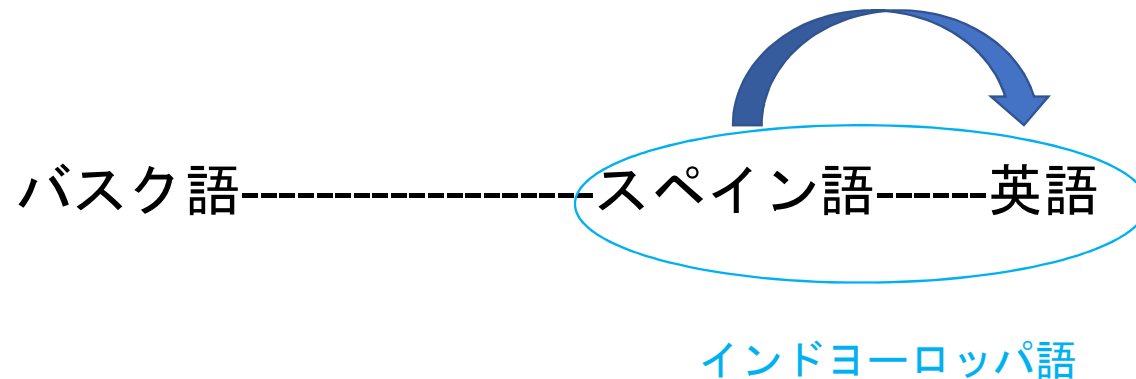
バスク語-----スペイン語-----英語

インドヨーロッパ語

# 転移の研究例 1

- Cenoz 2001

スペイン語・バスク語のバイリンガルの英語習得を研究



スペイン語の方が習得に有利に影響した

# 転移の研究例 2

- Ringbom (2001)

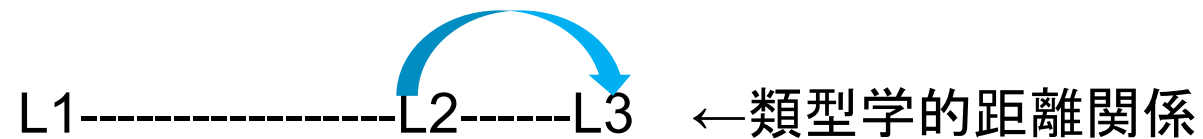
L1-----L2-----L3 ← 類型学的距離関係

語彙(lexical)の転移は？

文法(grammar)・意味(semantic)の転移は？

## 転移の研究例 2

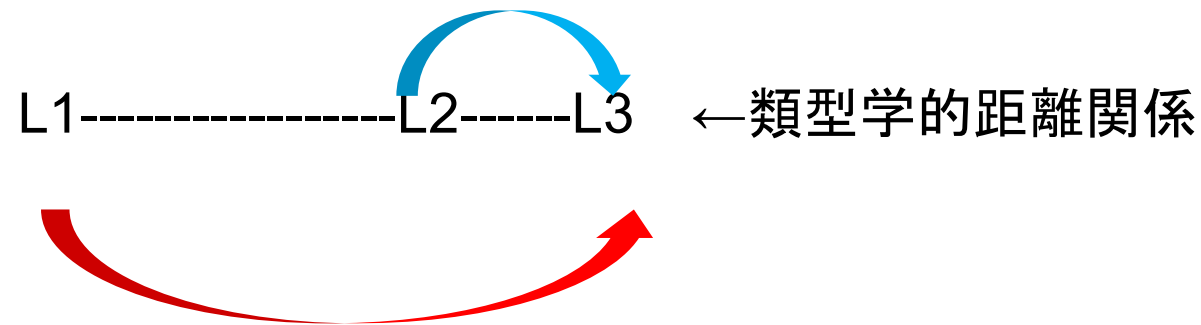
- Ringbom (2001)



語彙(lexical)の転移はL2によって  
文法(grammar)・意味(semantic)の転移は？

## 転移の研究例 2

- Ringbom (2001)

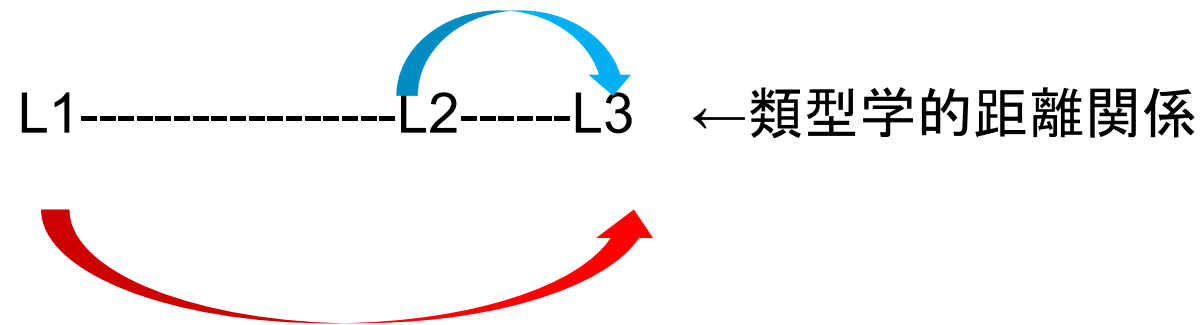


語彙(lexical)の転移はL2によって

文法(grammar)・意味(semantic)の転移はL1によってもたらされた

## 転移の研究例 2

- Ringbom (2001)



語彙(lexical)の転移はL2によって

文法(grammar)・意味(semantic)の転移はL1によってもたらされた

⇒ 転移は言語サブシステムによって影響源が異なる



# 転移の研究例 3

- Hammarberg (2001)
  - L1 : 英語
  - L2 : ドイツ語
  - L3 : スウェーデン語

スウェーデン語のスピーキングにおけるエラーを分析

# 転移の研究例 3

- Hammarberg (2001)

- L1 : 英語

- L2 : ドイツ語

- L3 : スウェーデン語

スウェーデン語のスピーキングにおけるエラーを分析

L2がエラーに大きな影響を与えている

# 転移の研究例 3

- Hammarberg (2001)

- L1 : 英語

- L2 : ドイツ語

- L3 : スウェーデン語

スウェーデン語のスピーキングにおけるエラーを分析

L2がエラーに大きな影響を与えている

⇒ 「L2とL3は共に“外国語”という学習者の認識」  
「学びの最近さ(recency)」がその理由

# 転移の研究例 4

- Kellerman (1978)

第二言語習得にプロトタイプ研究を応用

同語族の単語**breken**(オランダ語)と**break**(英語)を用いた例文2つを用意し、そのそれぞれで言語間の転移は可能かどうかをオランダ語話者に尋ねた。

# 転移の研究例 4

- Kellerman (1978)

【質問】 このオランダ語⇔英語は転移可能？

breken	⇔	break	
① Hij <b>brak</b> zijn been.	⇔	He <b>broke</b> his leg.	?
② Zijn val werd door een <b>gebroken</b> .	⇔	His fall was <b>broken</b> by a tree.	?

# 転移の研究例 4

• Kellerman (1978)

【質問】 このオランダ語⇔英語は転移可能？

breken	⇔	break	
① Hij <b>brak</b> zijn been.	⇔	He <b>broke</b> his leg.	中核的な意味 「壊す」
② Zijn val werd door een <b>gebroken</b> .	⇔	His fall was <b>broken</b> by a tree.	周辺的な意味 「遮る」

# 転移の研究例 4

• Kellerman (1978)

【質問】 このオランダ語⇔英語は転移可能？

breken	⇔	break	
① Hij <b>brak</b> zijn been.	⇔	He <b>broke</b> his leg.	
② Zijn val werd door een <b>gebroken</b> .	⇔	His fall was <b>broken</b> by a tree.	?

中核的な意味  
彼は足を折った

周辺的な意味  
彼の落下は木によって遮られた  
→彼は木に落ちた

# 転移の研究例 4

• Kellerman (1978)

【オランダ語母語話者の回答】 中核的意味での使用の方が転移可

breken	⇔	break	
① Hij <b>brak</b> zijn been.	⇔	He <b>broke</b> his leg.	◎
② Zijn val werd door een <b>gebroken</b> .	⇔	His fall was <b>broken</b> by a tree.	△

中核的

周辺の



# 転移の研究例 4

- Kellerman (1978)

【実際には】両方とも転移可能

breken	⇔	break	
① Hij <b>brak</b> zijn been.	⇔	He <b>broke</b> his leg.	◎ 中核的
② Zijn val werd door een <b>gebroken</b> .	⇔	His fall was <b>broken</b> by a tree.	◎ 周辺の

# 言語間の影響を予測する難しさ

- 転移を考える上で考慮すべき要因
  - 類型学的距離
  - L2の習熟度(Ringbom 2001)
  - L2のステイタス(Hammarberg 2001)
  - 何の転移を見るのか(Ringbom 2001)
  - 背景要因(Kellerman 1977, 1978)
    - 年齢
    - モチベーション
    - 教養レベル
    - 社会階級...

# 言語間の影響を予測する難しさ

- Transfer(転移) (Odlin 2003)
  - 学習者が言語間の類似性を感じたときに（無意識的or意識的）起きる (cf : Andersen 1983)
  - 学習者個々人の「言語間に類似性があるという判断 (interlingual identification)」によるもの

# 言語間の影響を予測する難しさ

- Transfer(転移) (Odlin 2003)

- 学習者が言語間の類似性を感じたときに（無意識的or意識的）起きる (cf : Andersen 1983)
- 学習者個々人の「言語間に類似性があるという判断 (interlingual identification)」によるもの



主観的

# 転移の研究例 5

Giacobbe (1992)

スペイン人フランス語学習者

移動動詞allerの転移（スペイン語と同語族）

# 転移の研究例 5

Giacobbe (1992)

スペイン人フランス語学習者

移動動詞allerの転移（スペイン語と同語族）

→移動を表す前置詞で現れた

# 言語間の影響を予測する難しさ

- Transfer(転移) (Odlin 2003)

- 学習者が言語間の類似性を感じたときに（無意識的or意識的）起きる (cf : Andersen 1983)
- 学習者個々人の「言語間に類似性があるという判断 (interlingual identification)」によるもの
- 多種多様な方法で表面化する (cf : Nemser 1971, Giacobbe 1992)

# 言語間の影響を予測する難しさ

- Transfer(転移) (Odlin 2003)

- 学習者が言語間の類似性を感じたときに（無意識的or意識的）起きる (cf : Andersen 1983)

- 学習者個々人の「言語間に類似性があるという判断 (interlingual identification)」によるもの

- 多種多様な方 (cf : Nemser 1983)

- Kellerman 1978

対象研究のみに頼らず、学習者の判断を考慮に入れる必要性を主張

- Odlin 2003

CLIを扱う多くの研究者は行動主義的観点を保持していない



# CIAとSLAの違い

SLA		CIA
理論	⇔	方法論
類型学的観点		産出データ
形態統語研究		語彙、談話

# CIAとSLAの違い

SLA		CIA
理論	⇔	方法論
類型学的観点		産出データ
形態統語研究		語彙、談話

# コーパス言語学におけるCIAの例

- CIAの手法は幅広い研究に用いられている

<http://www.learnercorpusassociation.org/>

- 学習者のL1は英語60%、その他の言語40%
- 主に書きことばに関する研究⇒話しことばの研究も進む

# コーパス言語学におけるCIAの例

• SLA : 形態統語研究 ⇔ CIA : 語彙、談話

• 語彙⇒句レベル

(コロケーション、コリゲーション\*、MWU、コロストラクション\*)

\*語彙と文法の共起関係

\*\*語彙と構文の共起関係

• 談話⇒接続語,DM,決まった言い回し

• 品詞タグ付きコーパスに基づく文法的な研究

# CIAへの批判とその反論

- Comparative fallacy
- Norm

# CIAへの批判とその反論

- Comparative fallacy (Bley-Vroman 1983)
  - = 目標言語と比較することによって、学習者言語の言語的特徴が見えにくくなること
  - 中間言語は中間言語の枠組み内で記述されるべき(Selinker 2014)
  - 理想化されたネイティブの発話を習得の成功として捉えることは、中間言語を欠落とみなすことにつながる(Larsen-Freeman 2014)
  - 母語話者の規範を目標としている(Hunston 2002)

# CIAへの批判とその反論

- Comparative fallacy (Bley-Vroman 1983)

= 目標言語と比較することによって、学習者言語の言語的特徴が見えにくくなること

- 中間言語は中間言語の枠組み内で記述されるべき (Selinker 2014)
- 理想化されたネイティブの発話を習得の成功として捉えることは、中間言語を欠落とみなすことにつながる (Larsen-Freeman 2014)

- 母語話者の規範

反論：

- 理論と方法論を混同してはいけない (Tenfjord et al. 2006)
- SLA研究は、目標言語や中間言語に備わる概念に暗に基づいている (Sung Park 2004)
- SLA研究は、脳内にある目標言語によって学習者の能力レベルを判断しているため、能力レベルを比較する研究はすべてL1の規範に則っている (Granger 2009)
- 学習者は母語話者の規範に目を向けさせられており、学習者自身もL2学習プロセスにおいて意識的に比較している (Ellis&Barkhuizen 2005)

# CIAへの批判とその反論

- Norm

=母語話者による言語を参照し、規範とすること

- World Englishes

- 英語が国際語となりつつあるため、英語話者を「母語話者」と「非母語話者」と分かつ二項対立には齟齬が生じてきた (Brutt-Griggler&Samimy 2001)
- 学習者の地域的な環境に目を向けるべき (cf. Thai English) (Tan 2005)

- English as a Lingua Franca (非母語話者同士の英語使用)

- ELFのインタラクションの際、母語話者／非母語話者の二項対立は適切ではないし、有用でもない (Cogo&Dewey 2012)
- 母語話者ではなく、ELFの成功した使用者のパフォーマンスと比較するのがより適切 (Aston 2011)



# CIAへの批判とその反論

- Norm

=母語話者による言語を参照し、規範とすること

- World Englishes

- 英語が国際語となりつつあるため、英語話者を「母語話者」と「非母語話者」と分かつ二項対立には齟齬が生じてきた (Brutt-Griggler&Samimy 2001)
- 学習者の地域的な環境に目を向けるべき (cf. Thai English) (Tan 2005)

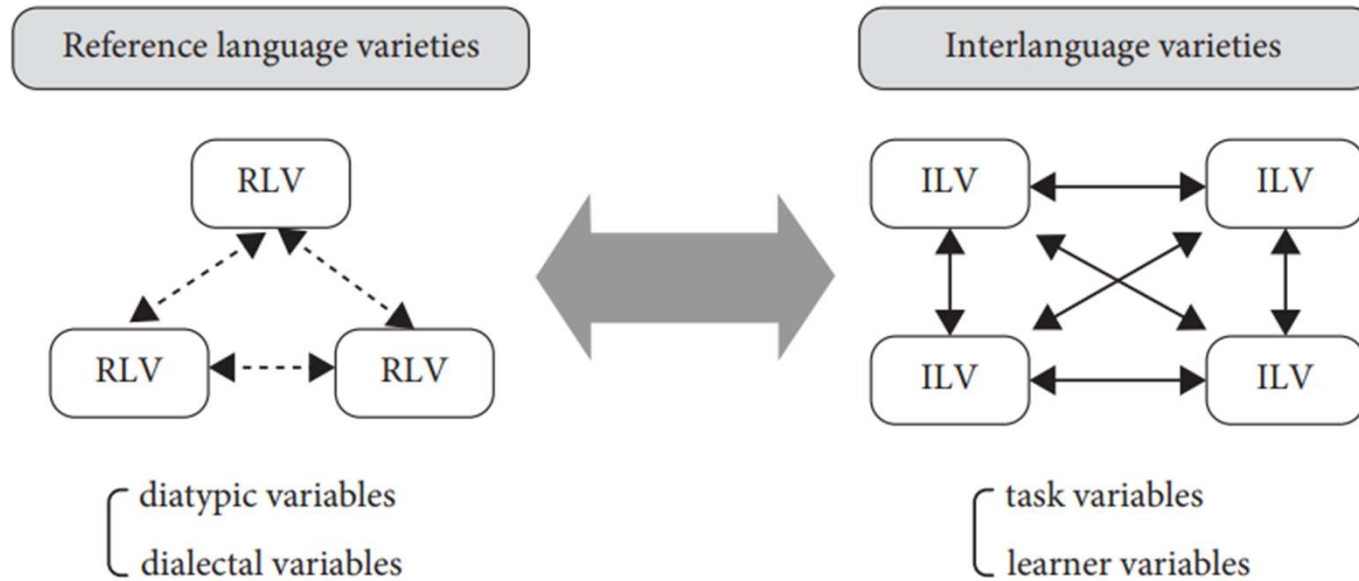
- English as a Lingua Franca (非母語話者同士の英語使用)

- ELFのインタラクションが、有用でもなく、適切 (Aston 2001)

反論：

- International Corpus of Englishなど、英語のバラエティに富むコーパスもある
- ELFのエキスパートによる言語についての詳細な定義もなく、許容できるELFの特徴か否かを区別する方法もない (Ferguson 2009)
- ELFもCIAも比較方法は似ている (English as a native languageとの比較)

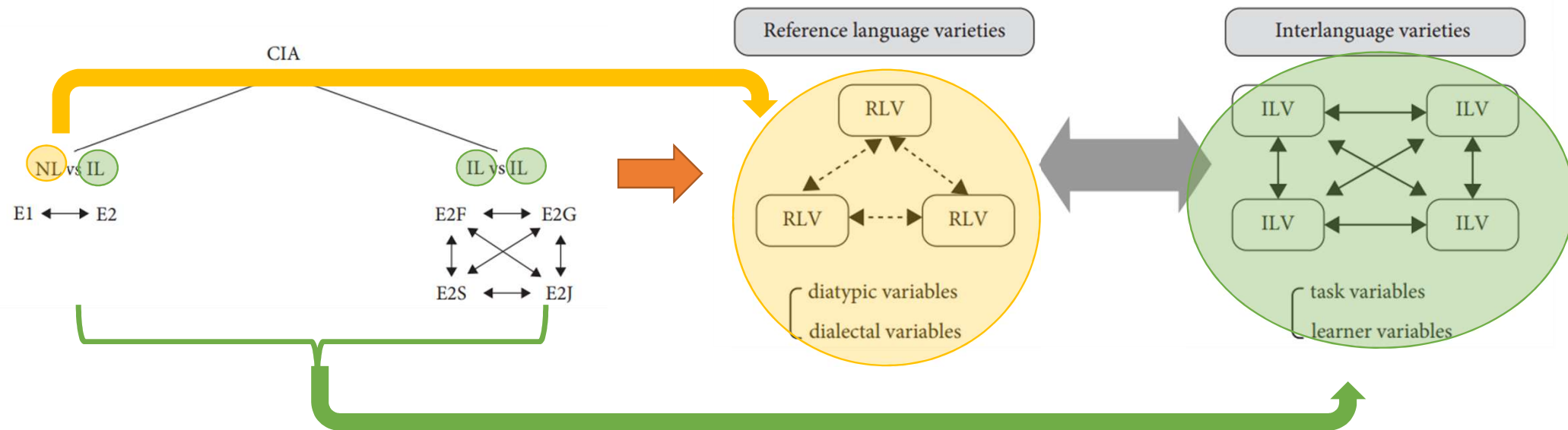
# 新CIAモデル



Varieties (多様性) の概念

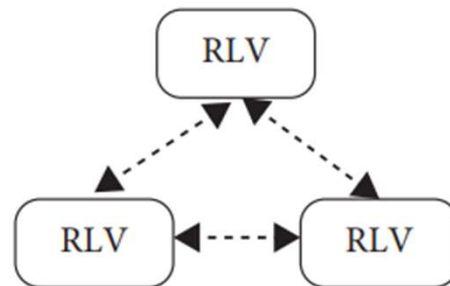
# 新CIAモデルの改良点

- 母語話者／非母語話者という用語を整理し、あいまいさを排除
- 中間言語分析におけるvariationをより明示的なものにした



# 新CIAモデル

Reference language varieties



diatypic variables  
dialectal variables

## 参照言語の多様性

- 言語使用環境、地域別 (cf. ELF)
- (母語話者／非母語話者を問わず)分野に精通しているか否か
- ジャンル

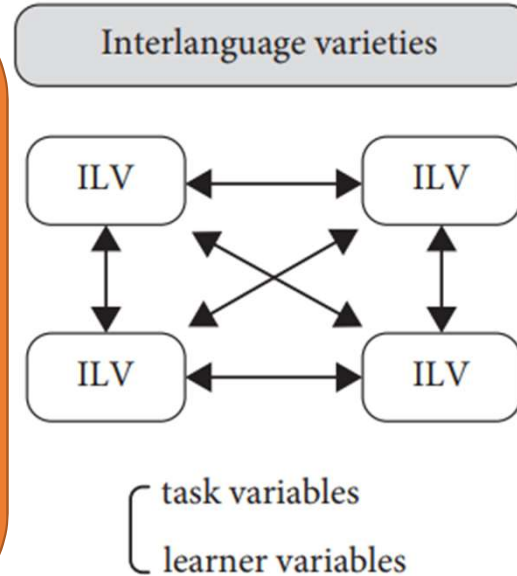
※参照コーパス≠規範

Varieties (多様性) の概念

# 新CIAモデル

## 中間言語の多様性

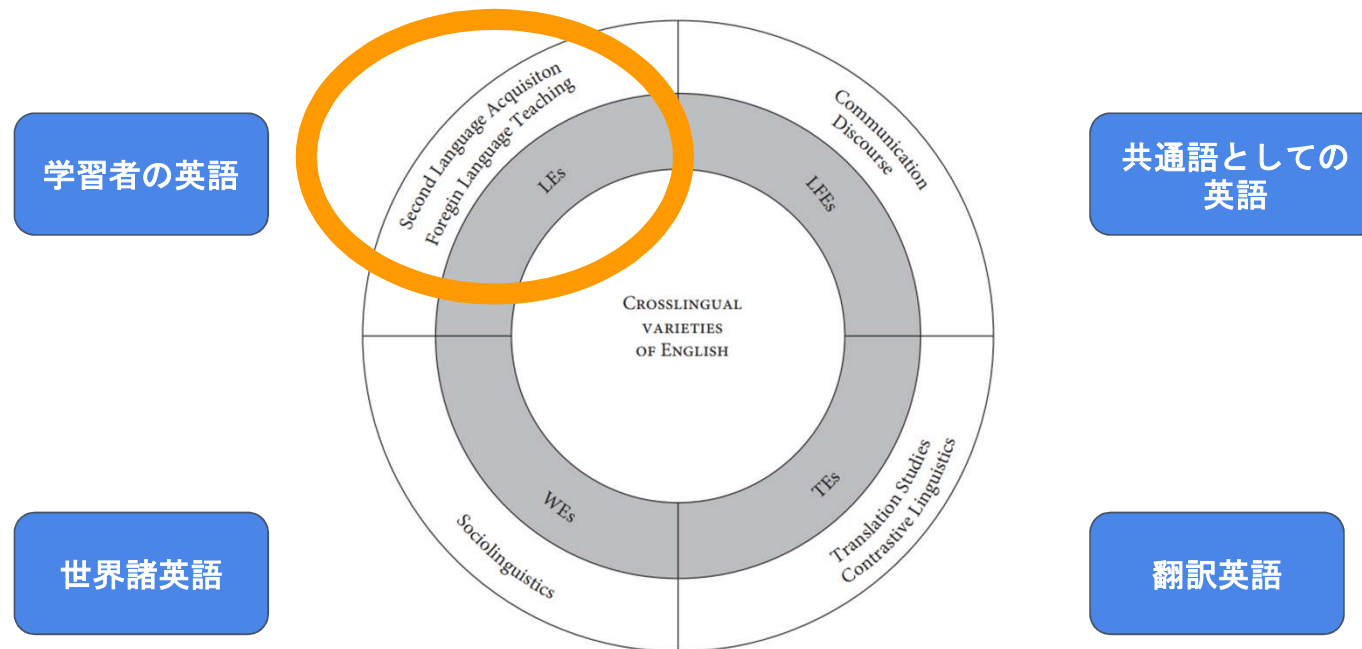
- 学習者の母語
- タスクの種類 など



Varieties (多様性) の概念

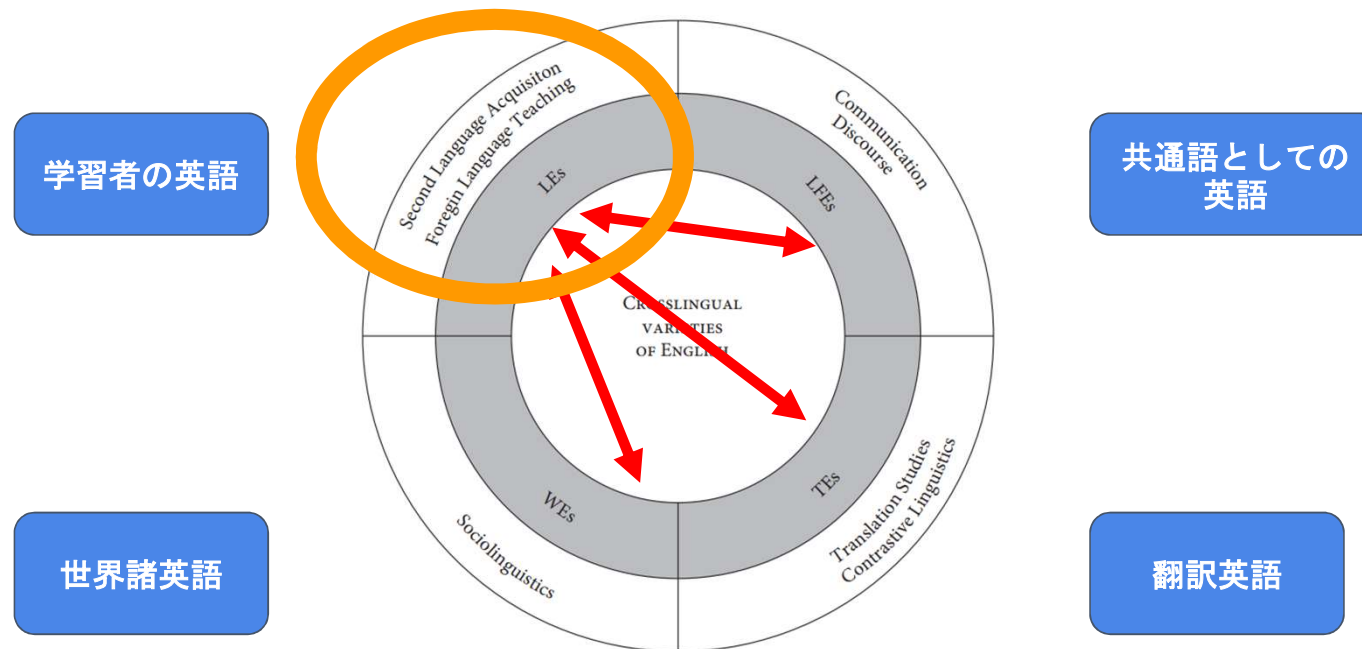
# CIAモデルの今後の可能性

- 中間言語と他の言語横断的バラエティとの比較



# CIAモデルの今後の可能性

- 中間言語と他の言語横断的バラエティとの比較



# CIAモデルの今後の可能性

- 中間言語と他の言語横断的バラエティとの比較

